

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 限界に挑む。
- (2) こんな荒天では船は出せない。
- (3) 足袋を履く。
- (4) 高樓に上る。
- (5) 条件が斉一になる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 新年ハイガ式が行われる。
- (2) ソカク当日の様子が報道される。
- (3) 光沢のあるジキの皿を贈る。
- (4) 平和主義の理念を憲法にモる。
- (5) 彼はチヨクジョウケイコウな人物である。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

終戦後の昭和二十年の冬、十五歳の「ぼく」は上級学校進学のために、再開された私学の中学校（旧制中学）にもどった。勉強する態勢が十分でなく、様々な境遇、年齢の生徒がいる中で、ただ一人の同学年生である「山口」を話し相手にしようと「ぼく」は考えていた。ある日の昼、「ぼく」は「山口」と屋上で出くわした。

ぼくは、頑なに背を向けたままのその山口に、ある敵愾心をかんだ。彼に目もくれず、だからぼくも一人で壁に向かい、自分だけの慶早戦をはじめた。真向から吹きつけてくる青く透きとおった風を感じながら、耳のなかに、かつて通った神宮球場の歓声や選手たちの掛声をよみがえらせ、怒ったように力いっぱいぼくは投げつづけた。

(1) 彼を無視する強さを、ぼくは獲得しようとしていたのだ。山口は、だが、なにもいわず、そうかといってそのぼくを眺めるでもなく、散歩するでもなく降りて行くでもなく、ただじっと金網越しの下界を眺めつづけている。そしてぼくは、しだいにその彼の存在を忘れ、空想の慶早戦に熱中しだしていた。

四対零。ケイオーのリードで三回は終わった。さあ、飯をたべよう。振りかえつて、ぼくは自分の強さの確認と、専心していたスポーツに

一段落のついた爽快で無心な気分から、ほがらかに山口を見て笑った。すると、彼は意外にも、偶然ぼくと目を合わせたのを恥じるように、山肌に淡く雲影が動くような、無気力な微笑をうかべた。……彼の、そんな微笑なんて、ぼくには初めての経験であった。その笑顔には、いわば秘密の頷ちあめいた暗黙の連帯と、それを恥じながら認める感情の手ごたえとが、たとえ力無くではあろうと含まれていたのだ。

——友人になれる。そんな無邪気な直観が、ぼくを陽気にした。ぼくはボールをポケットに押しこみ、拾った弁当箱を片手に、まっすぐに山口のほうに歩み寄ろうとした。

そのとき、弱よわしく視線を落した山口の目が、ぼくの弁当にふれると、急にそれを滑りぬけて流れた。はっと、はじめてぼくはあることに気づいた。そうだ、彼はいつも昼食をたべてないのだ。——昼休みのはじまるころになると、彼はいつでもスーッと部屋を出て行ってしまふ。なんの気なしにその姿勢を憶えていながら、その理由にいままで気づかなかったぼくは、なんてバカだ。……だが、はたしていま、彼に弁当を半分すすめたものだろうか？

じつをいえば、そのときぼくを躊躇させたものは、ほかならぬ自身自身の昼食が半分減ること、そんな自分の空腹の想像などではなかった。そんなことは、まったくぼくの頭にはなかった。——それは、恥ずかしいことだが、「善いこと」をするときの、あの照れくささであり、奇妙な後ろめたさだった。

つづいて、ぼくに弁当をつくるために昼食を抜いている、母への罪悪がはじまる予感がきた。気の弱いぼくのことだ、一度それしたら、おそらく習慣にせざるをえなくなってしまうだろう。すると、帰途の汽車の中で、あの疼痛に似たせつない空腹感、やがて空ききってそれが痛みかどうかさえわからなくなり、ただ、どこにも力入れようのない苛立たしさがからだ全体に漂いだし、遠くのものがかすみ、近いものが揺れて見えはじめ、あのその次の状態が、なまなましくぼくによみがえった。……だが、結局ぼくが弁当を分けることを中止しようと思ったのは、神経質で孤高で傲慢なほどプライドのつよい山口が、そのぼくの押売りじみた親切に、虚心にこたえてくれつこないという判断であり、おそれだった。(3) ぼくは、自分の弱さをそのまま投げかえされ、嘲笑されるのは、もうたくさんだと考えたのだ。

ぼくは思った。ぼくは、一人ではがらかに弁当を食おう。それはぼくの権利のフランクな主張であり、彼のプライドへのフランクな尊敬である。あたりまえのことをするのに、あたりまえの態度でしよう。人間どうしのつきあいでは、けっして触れてはいけない場所に触れるのは、いくらそれが好意・善意・親切からであつても、あきらかに非礼なのだ。……しかし、ぼくの足はもう、金網から手を放した彼のすぐ横にまで、自分を運んできてしまつていた。

「あすこ、日当りがいいな。……行こう。」

独り言のようにいうと、ぼくは晴れた冬の日がしずかにきらきらと溜つている、屋上の片隅にあるいた。返事はなかったが、山口はなにを考へてか、おとなしくぼくにつづいてきた。へんに反抗して、見透かされたくないのだろうか？ ぼくは、彼の不思議な素直さに、そう思った。

その片隅に腰を下ろしても、ぼくは黙つていた。同様に坐りながら、山口も無言だった。黙つたまま、ぼくが弁当の風呂敷包みを解き終つたとき、異様なほどの大きさでぼくの腹が、ク、ルル、ル、と鳴つた。

(4) はりつめた気がふいに弛み、ぼくは大声をあげて笑つた。……それがいけなかった。アルマイトの蓋をめくり、いつものとおり細いイカの丸煮が二つと、粟の片手にぎりほどの塊が六つ、コソコソと片寄つている中身を見たとき、ぼくの舌は、ごく自然にぼくを裏切つてしまつていた。

「よかつたら、たべろよ。半分。」

山口は奇妙な微笑をこわばらせて、首を横に振つた。それは、意志的な拒否というより、まだ首の坐らない赤ん坊が見せるような、あの意味もなにもないたよりない反射的な重心の移動のように、ぼくの目には映つた。

「たべなよ。いいんだ。」

山口は振幅をこころもち大きくして、もう一回首を振つた。膠着し

た微笑が消え、なにか、うつけたような茫漠とした表情になって、目を遠くの空へ放した。……激昂が、ぼくをおそつた。せつかくの先刻の思慮分別や後悔の予感も忘れはてて、恥をかかされたみたいにな、ぼくの頭と頬に血がのぼつた。

ぼくは、くりかえし低く、強くいった。

「ぼくは素直な気持ちでいってゐるんだ。お節介なことくらい、わかつてる。でも、腹がへつてるんだつたら、だめだ、食べなきゃ、食べなきゃ……、食べたらいいだろう？ 食べたかつたら。」

絶句して、やつとぼくは昂奮から身を離すべきだと気づいた。ぼくは握り飯の一つを取り、頬張つて横を向いた。もうどうにでもなれ、と思つた。こん畜生。もう、こんなバカとは、ツキアイきんない。……そのとき、山口の手が、ごく素直な態度で、弁当にのびた。

(5) 「——ありがとう。」
と、彼はぼくの目を見ずにいった。そして、握り飯をまつすぐ口にはうりこんだ。

まるで、ありえないことが起こつたように、ぼくは目の隅で山口が食べるのを見ていた。一口で口に入れて、彼は、わざとゆっくり嚙んでいくようであつた。

ある照れくささから、相手の目を見たくない気持ちはぼくにもあつた。無言のまま、ぼくらは正確に交互に弁当箱に手をのばした。当然の権利のように、彼はぼくがイカの丸煮をつまむと、ちゃんと残つた一つをつまんだ。……だんだん、ぼくはかれが傷つけられてはいないこと、あるいはそう振舞つてくれていることに、ある安堵と信頼を抱きはじめた。

それは、最後に残つた山口の分の一つに、彼の瘦せた青白い手が躊躇なくのびたのを見とどけたとき、ほとんど、感謝にまで成長した。——ぼくは、彼が狷介なひねくれた態度を固執せずに、気持ちよくぼくにこたえてくれたことがむしろ嬉しかった。

ぼくと山口とは、それからは毎日屋上を密会の場所と定めて、いつもぼくの弁当を半分こするようになった。

(山川方夫「煙突」による)

〔注〕旧制中学——第二次大戦前の制度で、高等普通教育を行った男

子中等学校。

頑かたくなに背を向けたまま——以前「ぼく」が話しかけた時、素っ

気ない態度をとられたことがあった。

敵愾てんがいしん心——敵を打ち倒そうとする気持ち。

自分だけの慶早戦——「ぼく」は慶応対早稲田わせだの大学野球対抗戦

をイメージして、屋上で壁かべにボールを投げ

る一人遊びをしていた。

疼痛とうつう——うずくような痛み。

孤高——ひとり超然としている様子。

フランク——率直な様子。

アルマイト——アルミニウム製の食器。

膠着こうちやく——ねばりついたように動かない様子。

うつけたような——ほんやりした様子。

茫漠ぼうぼく——ぼうつとしてはつきりしない様子。

激昂げつこう——怒りはげしく興奮すること。

ツキアイきんない——付き合いきれない。

狷介けんかい——かたくなな様子。

〔問1〕彼を無視する強さを、ぼくは獲得しようとしていたのだ。

とあるが、どのようなことか。その説明として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 「山口」が下界を眺めている意味を考えつつも、空想の慶早戦に熱中して心を乱されないようにしようということ。

イ せっかく空想の慶早戦に熱中しているのだから、「山口」に心を乱されないようにしようということ。

ウ 自分を非難するような態度をとる「山口」に怒りを覚えたので、自分も徹底的に彼を無視し続けるということ。

エ 「山口」の存在が気になりつつも、そうした素振りを見せないで自分の世界に入り込もうとしたということ。

〔問2〕⁽²⁾ 山肌に淡く雲影が動くような、無気力な微笑をうかべた。

とあるが、「山口」のどのような様子をたとえたものか。その説明として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 「ぼく」の爽快な笑顔を見て、一人遊びのむなしさを感じとってしまい、とまどいを覚えている様子。

イ 「ぼく」のほがらかな笑顔を見て、思わずそれに応じるかのようにはにかんだ表情を見せた様子。

ウ 「ぼく」の無心な笑顔を見て、意味のない一人遊びに熱中していた「ぼく」をあざ笑っている様子。

エ 「ぼく」のすがすがしい笑顔を見て、お互いの気持ちを通じ合い、友情が確かなものだと喜びを感じている様子。

〔問3〕⁽³⁾ ぼくは、自分の弱さをそのまま投げかえされ、嘲笑されるのは、もうたくさんだと考えたのだ。とあるが、どのような

ことか。その説明として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 「山口」への好意を拒絶されることで、自分の人のよさを改めて浮き彫りにされ、冷ややかに見られたくないということ。

イ 「山口」に善意を踏みこまれることで、母への罪悪感に後悔する自分の善良さを自覚させられることはうんざりだということ。

ウ 無理して弁当を分けることで、結局空腹で不快になる様子をさらけ出し「山口」にばかにされるのは耐えられないということ。

エ 自分一人で弁当を食べられない気の弱さを自覚させられ、善人ぶっているのだと「山口」にあざ笑われるのはごめんだということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ はりつめた気がふいに弛みに、ぼくは大声をあげて笑った。

とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文章にあてはまることばを二十字以上三十字以内で書け。

お互いがどう接するかわからず、はりつめて向き合っている時に、

【 から。】

〔問5〕「——ありがとう。」と、彼はぼくの目を見ずにいった。⁽⁵⁾

とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 「ぼく」の申し出に対してあいまいに反応をしていたのに弁当に自然と手が伸びてしまったので、合わせる顔がないと思ったから。

イ 「ぼく」の申し出に素早く答えることができずに怒らせてしまったので、申し訳ないことをしたという気持ちが出てきたから。

ウ 繰り返し「ぼく」の申し出を断った後で好意を受け入れようと決心したので、面と向かって礼を言うことが気恥ずかしかったから。

エ 思いもよらぬ「ぼく」の申し出にすっかり感激してしまったので、喜びの表情を読み取られてからかわれたくなかったから。

〔問6〕 本作品の表現について述べた説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「青く透きとおった風」、「彼の瘦せた青白い手」など色の表現を用いることで、多感な青春時代のさわやかな空気をそれとなく表現している。

イ 「……」の後では、「ぼく」の心中で思い浮かんだことを記し、「——」の後では直前で述べられたことの事情や補足説明を記すなどの使い分けがされている。

ウ 「ぼくの舌は、ごく自然にぼくを裏切ってしまった」では、人ではないものを主語にすることで、思いがけない心情の揺らぎを表現している。

エ 「ぼく」の視点を中心にして心理を描くことによって、「山口」の視点で語っている箇所を際立たせて、その印象を強める効果を上げている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

和漢の境をまたぐとは、中国（漢）と日本（和）の交流が融合しつつ、しだいに日本独自の表現様式や認知様式や、さらには中世や近世で独特の価値観をつくっていったということです。

これはおおざっぱには、次のようなことを意味しています。アジア社会では長らく中国が発するものをグローバルスタンダードとしての規範にしてきたのですが、そのグローバルスタンダードに学んだ日本が、奈良朝の『古事記』や『万葉集』の表記や表現において、一挙にローカルな趣向を打ち出し、ついに「仮名」の出現によって、まさにまったく新たな「グローバルな文化様式」や「クレオールな文化様式」を誕生させたということです。しかも、その後はこれを徹底して磨いていった。何を磨いたかというクレオールな「和漢の境」を磨いていったのです。なぜ、このようなことをしたのか。なぜそんなことが可能になったのか。たんに知恵に富んでいたわけではないのです。

二、三の例で説明します。

たとえば禅宗は中国からやってきたもので、鎌倉時代には栄西や道元はじつさいに中国に行つて修行もしています。しかし、日本に入つて各地に禅寺が造営されるようになると、その一角に「枯山水」という岩組みや白砂の庭が出現します。竜安寺や大徳寺が有名ですが、このような庭は中国にはないものです。

中国の庭園（園林と総称します）は植物も石もわんざとあります。日本の禅庭は最小限の石と植栽だけでつくられ、枯山水にいたっては水を使わずに石だけで水の流れを表現します。つまり引き算がおこっているのです。

(a)

お茶も中国からやってきたものでした。栄西が『喫茶養生記』でその由来を綴っている。しかし日本では、最初こそ中国の喫茶習慣をまねていたのですが、やがて「草庵の茶」という侘び茶の風味や所作に転化していきました。またそのための茶室を独特の風情でつくりあげた。身ひとつが出入りできるだけの小さな躰口を設け、最小のサイズの床の間をしつらえた。部屋の大きさも広間から四畳半へ、三帖台目へ、さらには二帖台目というふうになっていく。こんなことも中国の喫茶にはありません。ここにも引き算がおこっているのです。

侘び茶や草庵の茶に傾いた村田珠光は、短いながらもとても重要な『心の文』という覚え書のなかで、そうした心を「和漢の境をまぎらかす」と述べました。たいへん画期的なテーゼでした。

このように、日本は「漢」に学んで漢を離れ、「和」を仕込んで和漢の境に遊ぶようになったのです。

日本列島は二〇〇万年前まではユーラシア大陸の一部でした。それが地質学でいうところのプレートテクトニクスなどの地殻変動によって、アジア大陸の縁の部分が東西に離れ、そこに海水が浸入することで日本海ができて大陸と分断され、日本列島ができあがったと考えられています。

このような成り立ちをもつゆえに、日本列島が縄文時代の終わり頃まで長らく大陸と孤絶していたという事実には、きわめて重いものがあります。日本海が大陸と日本を隔てていたということが、和漢をまたいだ日本の成り立ちにとって、きわめて大きいのです。

その孤立した島に、遅くとも約三〇〇〇年前の縄文時代後期までには稲作が、紀元前四〜前三世紀には鉄が、四世紀後半には漢字が、いずれも日本海を越えて大陸からもたらされることになった。「稲・鉄・漢字」という黒船の到来です。

とりわけ最後にやってきた漢字のインパクトは絶大でした。日本人が最初に漢字と遭遇したのは、筑前国（現在の福岡県北西部）の志賀島から出土した、あの「漢委奴国王」という金印であり、銅鏡に刻印された呪文のような漢字群でした。これを初めて見た日本人（倭人）たちはそれが何を意味しているかなどまったくわからなかったにちがいない。しかし中国は当時のグローバルスタンダードの機軸国であったので、日本人はすなおにこの未知のプロトコルを採り入れることを決めた。

(b)

ところが、最初こそ漢文のままに漢字を認識し、学習していったのですが、途中から変わってきた。日本人はその当時ですでに一万〜二万種類もあつた漢字を、中国のもともとの発音に倣って読むだけではなく、縄文時代からずっと喋っていた自分たちのオラル・コミュニケーションの発話性に合わせて、それをかぶせるように読み下してしまつたのです。

私はこれは日本史上、最初で最大の文化事件だつたと思っています。日本文明という見方をするなら、最も大きな文明的事件だつたでしょう。ただ輸入したのではなく、日本人はこれを劇的な方法で編集した。

漢字の束を最初に日本（倭国）に持ってきたのは、百済からの使者たちでした。

応神天皇の時代だから四世紀末か五世紀初頭でしょう。阿直岐が数冊の経典を持ってきた。当時の日本は百済と同盟関係になるほどに親交を深めていました。

阿直岐の来朝からまもなく、天皇の皇子だつた菟道稚郎子がこの漢字に関心をもち、阿直岐を師と仰いで読み書きを習いはじめました。これを見た応神天皇が、宮廷で交わしている言葉を文字であらわすことに重大な将来的意義があると感して、阿直岐に「あなたに勝る博士はお

られるか」と尋ねたところ、「王仁という秀れた者がいる」と言います。さっそく使者を百済に遣わしてみると、王仁が辰孫王とともにやってきた。このとき『論語』『千字文』あわせて一巻の書物を持ってきた。

このことは、見慣れない「文字」とともに「中国儒教の言葉」がやってきたことを意味します。そうして朝廷に中国語の読み書きができる人材がいよいよ出現してきたのです。

それなら、こうした外国語学習ムーブメントが日本の中に少しずつ広まって、みんなが英会話を習いたくなるように、やがて中国語に堪能な日本人（倭人）がふえていくはずですが、実際、たしかにそういうリテラシーの持ち主はふえたのですが（貴族階級や僧侶に）、だとすれば今日の日本人が英会話をし、英語そのままの読み書きができるのと同じように、多くの日本人が中国語の会話をできるようになって当然だつたのです。が、そうはならなかつた。

中国語をそのまま使っていくのではなく、漢字を日本語に合わせて使つたり日本語的な漢文をつくりだしたりした。

(c)

『日本書紀』の推古天皇二八年（六二〇）に、聖徳太子と蘇我馬子が『天皇記』と『国記』の編述にとりくんだという記事があります。

このとき、おそらく中国語ではない「中国的日本語のような記述」が誕生したのだろうと思います。いわばチャイニーズ・ジャパニーズです。ただし、この『天皇記』と『国記』は乙巳の変（大化改新）のとき、蘇我蝦夷の家とともに焼けてしまった。

まことに残念なことですが、さいわい天武天皇のとき（六八二）、川島皇子と忍壁皇子が勅命によって『帝紀』と『旧辞』を編纂することにになりました。

当然、漢字ばかりのものです。しかし、これも中国語ではない。やはりチャイニーズ・ジャパニーズっぽいものでした。しかもこのとき、こ

の中身を稗田阿礼が誦習して半ばを暗記した。稗田阿礼という人物はまだ正体がわかっていないので、ひよっとしたら一人ではない集団名だったのかもしれないのですが、それはともかく、阿礼は『帝紀』や『旧辞』の漢字漢文を中国語で誦習したではありません。日本語として誦習した。

(d)

ついで和銅四年(七二一)、元明天皇は太安万侶に命じて『古事記』を著作させました。ここでついに画期的な表現革命がおこりました。

太安万侶は稗田阿礼に口述させ、それを漢字四万六〇二七字で『古事記』に仕上げるのですが、表記に前代未聞の工夫をほどこした。漢字を音読みと訓読みに自在に変えて、音読みにはのちの万葉仮名にあたる使用法を芽生えさせたのです。

⁽⁵⁾これはそうとう画期的なことでした。表記上で画期的だっただけでなく、日本人が縄文以来つかってきた言葉を「漢字の声」であらわすことができたということが、さらに画期的なのです。私たちは漢字を見ても、日本語の声で読めるようになったのです。

たとえば「大」という字を音読みすると「ダイ」になるのは、もともと中国でこの字を「ダイ」と発音していたことにもとづいています。近似音でダイにした。しかし日本人は「大」を自分たちの古来の言葉であった「おお」「おおし」「おおき」などの言葉に適用するために訓読みもするようになり、さらに音読みと訓読みを平然と使いわけるようになっていったのです。「生」はショウウ(一生)ともセイ(生活)ともキ(生蕎麦)とも読み、かつ「いきる」「うまれる」「なま」などとも読んだのです。まことに驚くべきことです。

自分たちの発明した漢字をこのように使えることは、中国人にとつては予想もつかないことでした。私たちは中国というグローバルスタンダードを導入し、学び始めたその最初の時点で早くもリミックスを始めていたのです。

かくてここに登場してきたのが日本独自の「仮名」でした。

(松岡正剛「日本文化の核心」による)

〔注〕グローバルスタンダード——国際的に共通の基準。

クレオール——混交的な文化。

禪宗——仏教の一派。日本では、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗がある。

侘び茶——桃山時代に流行した、簡素静寂の境地を重んじたもの。

村田珠光が祖とされている。

躰口——茶室特有の小さな出入口。

テーゼ——命題。ある判断を言葉で言い表したものを。

プレートテクトニクス

——地球のさまざまな変動の原動力はプレートの運動にあるとして、地震や火山などの地学現象を統一的に解釈しようとする考え方。

プロトコル——ここでは言語の規約の意。

オラル・コミュニケーション——口頭でのコミュニケーション。

百濟——古代朝鮮の国名。

阿直岐——この時代に百濟から日本へ派遣されたとされる人物。

儒教——孔子の教えを中心とした、中国の伝統的な政治・道徳の教え。

の教え。

ムーブメント——運動、動き。

リテラシー——ある分野についての知識やそれを活用する能力。

勅命——天皇の命令。

誦習——よみ習うこと。

万葉仮名——漢字の音訓を借りて発音を写した文字。

リミックス——素材を混ぜて全く新しい作品に作り上げること。

〔問1〕「グローバルな文化様式」⁽¹⁾とあるが、それを「誕生させた」

とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 他国の文化に遅れをとらないように、競い合いつつも、独自の文化を磨き上げていったこと。

イ それぞれの地域の個性を生かしながら、統一された国としての文化の土台を固めていったこと。

ウ 自国の文化の特徴に一つの基準を設け、それを用いて他国と比較し独自性を明確にしていったこと。

エ 規範となる文化に学びつつ、自分たち独自の生活や風土に根ざした文化をつくりあげていったこと。

〔問2〕日本は「漢」に学んで漢を離れ、「和」を仕込んで和漢の

境に遊ぶようになったのです。とあるが、それはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 日本人は、中国文化に学んで素材として採り入れたものを、日本の自然や感覚に合わせて差し引きし、そこで生まれた独自の価値観を賞美するような文化をつくりあげていったこと。

イ 日本人は、中国文化と日本文化を融合した結果生まれた文化様式を受容し、一つの国の枠組みにとどまらない、多様な表現を楽しめるような文化をつくりあげていったこと。

ウ 日本人は、中国文化の様式を採り入れた上で、余計なものを除き素朴さや単純さを愛する国民性を強調することで、日本人の心情に即して余情を感じさせるような文化をつくりあげていったこと。

エ 日本人は、中国文化から学んだことを日本古来の形式にあてはめて文化を再創造するため、人工物を排除し、自然物を利用して和漢の融合を象徴的に表現するような文化をつくりあげていったこと。

〔問3〕「⁽³⁾稲・鉄・漢字」という黒船の到来です。とあるが、「黒船の到来」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 大陸と孤絶しており、文化的に未熟であった日本にとって、国力の伸長を示す威圧的なものであり、他国より劣っていると感じさせるものであったということ。

イ 大陸と分断されているため、他文化が自然に流入しなかった日本にとって、生活様式や考え方が根本的に変わってしまうほど先進的であり、圧倒的な衝撃を与えるものであったということ。

ウ 独自の高度な文化が既に発展していた島国の日本にとって、新鮮に感じられ、今後自文化がさらに深化していくきっかけとなると期待させるものであったということ。

エ もとは一つの大陸であったものが東西に離れた⁽⁴⁾経緯をもつ日本と中国であるからこそ、日本にとって中国は異国とは思えず、再びの結びつきを予見させるものであったということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ただ輸入したのではなく、日本人はこれを劇的な方法で編集した。とあるが、どのようなことか。その内容を説明した次の語句につづく形で四十五字以上六十字以内で説明せよ。

日本人は

一

〔問5〕⁽⁵⁾これはさうとう画期的なことでした。とあるが、「画期的な」表現を獲得するに至った経緯について五人の生徒が話し合いをした。話し合いの中でその経緯について正しく述べている生徒は誰か。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「漢字の束」は四世紀末か五世紀初頭に、阿直岐と王仁が⁽⁵⁾經典という形で日本にもたらした。菟道稚郎子は彼らに学んで日本に漢字を広めたんだ。

イ いや阿直岐は經典をもたらしたけど、王仁は「中国の儒教の言葉」をもたらしただけであって、漢字というより日本に重要な思想を伝える使命があったと言った方が正しいよ。

ウ いずれにしても「漢字の束」や「中国儒教の言葉」が日本に入ってきたことで中国語で会話できる日本人が増え、朝廷での意思疎通が便利になったんだね。

エ もちろん一部の日本人は中国語を駆使できたけれど、チャイニーズ・ジャパニーズのような言葉ができたことで、その後の表現革命につながったんだ。

オ このチャイニーズ・ジャパニーズがまさに画期的だったんだね。漢字の音を使うことで、日本語の語順に従って漢字と仮名で日本語を表現することができたんだ。

〔問6〕 次の文は本文の (a) (d) のどこに入れるのが適切か。
次のうちから最も適切なものを選び、ア～エの記号で答えよ。

まさに文明的な転換がおこったのです。

- ア (a)
イ (b)
ウ (c)
エ (d)

〔問7〕 波線部 和漢の境をまたぐとは、中国(漢)と日本(和)の交流が融合しつつ、しだいに日本独自の表現様式や認知様式や、さらには中世や近世で独特の価値観をつくっていったとあるが、このように中国の文化をもとに日本の文化を形成していったことについてどう思うか。また広く外国の文化を取り入れていくことについてどう考えるか。具体的な事例も含めてあなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章中の「私」とは『源氏の物語』を書いた紫式部のことであり、紫式部は一条天皇の后きさきである中宮彰子ちゅうくうしやうしに仕えていた。この文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

中宮様が私に『白氏文集』⁽¹⁾を読めと言われたのは、それが最も世間一般に知れ渡った漢詩文集だったからだろう。漢文のことを何も知らぬ中宮様でも、『白氏文集』の名はご存じだったというわけだ。作者白居易は唐代の詩人だが、本人の在世中から作品が日本にも伝わり、人気を博していた。最も有名なものは、実在の玄宗皇帝*げんそうていと楊貴妃*ようきひの悲恋ひれんを題材にした、幻想的な歴史悲劇「長恨歌」だ。私も『源氏の物語』を書く際、大いに参考にした。また白居易には日常生活を詠んだ美しい詩がたくさんある。友情の詩、田舎暮らしの詩、引退して悠々自適の生活を味わう詩。総じて彼の詩には漢文につきものの堅苦しさが少ない。文章が平易で日本人にも垣根かきねが低いことも、人気の理由だろう。そんな白居易の自選全集が『白氏文集』だ。

だが、中宮様のために私が選んだ教材は、彼の作品にしては多少毛色の違ったものだった。『白氏文集』全七十五巻のうち第三巻と第四巻の二巻を占める連作「新樂府」五十首である。白居易はその序で、「この作品は文学のために作ったのではない」と言っている。ならば何のために作ったのか。それは、政治のためだ。白居易の詩は、曲がつけられ歌となって、中国各地で万人に口ずさまれていた。白居易はそれを利用して、民衆の声として役人や皇帝に聞き届けられ、政治を変える詩を作ろうと企てたのだ。だから「新樂府」の内容は政治向きで、大変お堅い。例えば、税金を無駄に使うな。善政で民を天災から救え。胸躍る恋も切々たる感傷も無く、娯楽的とはとても言えず、品格はあるが面白くないとされている。特に、女性向きでは全くないといつてよいだろう。

それでも私がこれを中宮様のために選んだのには、理由があった。それは帝だ。帝は内裏みかどでしばしば詩の会を催され、自らも詠まれる。その御好みは、一般の方々とは少し違っていた。

帝は即位なさった時にはわずか七歳の幼さだったから、当初は祖父の藤原兼家*かみえ様が摂政せつしやうになられ、全権を掌握しやうあくされた。そしてその後は、兼家様の息子の道隆みちたか様へ、また道長みちちか殿へと権力がつなされた。だがそれは帝が無力なお飾りだったということではない。特に道長殿が権力の座に就かれてからは、公卿*くぎやうの意見を道長殿がとりまとめ、それを聞いて帝が決定なさるという形での、天皇親政を敷いておられる。政治に取り組まれる姿勢は実にひたむきで、そのことは漢学を学ぶ態度にも表れている。帝は、政治の思想と制度の先進国である中国に学ぼうとして、漢学にいそしまれているのだ。

私はこの話を父から聞き、父は帝の叔父*おじである中務*なかつか宮みや具平親王きへいしんのうから聞いた。ある時中務宮は、帝のこのような詩を、ひそかに耳にされたのだ。

書中に往事有り
御製ぎよせい

- ① 閑しづかに典墳てんぷんに就きて日を送る裡うち
- ② 其その中の往事 心情しんじやうに染む
- ③ 百王ひやくおうの勝躅しょうとく 篇へんを開けば見え
- ④ 万代ばんだいの聖賢 卷まきを展ひらぶるに明らかなり
- ⑤ 学び得ては 遠く虞帝ぐていの化を追ひ
- ⑥ 読み来ては 更さらに漢文の名に恥はづ
- ⑦ 多年 稽古きこ 儒墨じゆぼくを属まむれば
- ⑧ 底なに縁よりてか 此この時泰平たいへいならざらむ

書物の中には過ぎ去った日々の出来事がある。

御製（一条天皇）

心静かに古漢籍かんせきに向かって日を過ごしていると

書中に書かれた過ぎ去った出来事が心に染み入ってくる。

頁ぺじを開けば代々の王達たちの残した素晴らしい業績が見える。

卷子かんすを展べれば往古からの聖者賢人たちはつきりとその姿を現す。

遠く虞帝ぎょていの賢政から学ぶこともできるし

読むにつれてますます漢の文帝げんていの誉れに感じ入り、我が身を恥ずか

しく思うこともある。

だが、我も多年読書を重ね、儒者じゆしやたちや墨子兼愛ぼくしの学を修めてき

た。

このように儒学の本道を志して寛仁かんじんの政治を心がけてきたのだから、

どうしてわが国の世の泰平が実現しないでおかれようか。

〔『本朝麗藻』巻下〕

漢学を学び、為政者いせいしやとしてこの国を安寧あんねいに導きたい。帝は、そうし
た 気概を詠まれたのだ。

中務宮は、政治的に強い権限をお持ちではないが、学問によって人望を集めたお方だ。儒学を深く尊び、父のような漢学者を招いては厚く顧みて下さっていた。その傘下さんかの多くは、高い能力を持っているにもかかわらず、縁故が無く世の人事から取り残されてしまった学者たちだ。本当の意味での漢学とは何か。それは儒学だ。君と臣と民とが心を一つにして社会を整える思想だ。それが国のために役に立つ世こそが、宮や父たち、寒家さんかの文人の描く夢だった。今の貴族社会でそれは叶かないそうにない。だが少なくとも、帝の志はそこにあるという。

宮は、帝の漢学とまつりごとに対する真摯しんしな姿勢に感銘かんめいをうけた。そして自ら帝を称たえる詩を作り、帝に贈おくられた。帝は嬉うれしく思われたのだ。

ろう。あるいは、本音を吐ける味方を得たとお感じになったのだろう。宮に返答の詩を書かれて、またそれに宮が返され、結局やりとりは二往復にもなった（『本朝麗藻』巻下）。儒学に基づき善政を行う意欲に満ちた帝。帝を理解し、支える宮。お二人の詩の往復を、宮家の長年の下僕しもべである父は、しみじみとした思いで聞いたことだろう。私とて同じ気持ちだ。これこそ、真の漢学者の求めていたやりとりだ。

帝は『白氏文集』もお好きだ。そして、その中で最も儒学的な作品が「新樂府」だ。民が天子に心を伝えるための詩。天子が民の心を知るための詩、善きまつりごとのための詩だ。もしも中宮様が帝の心に寄り添いたくて漢学に手を伸ばされたのであれば、内容が無骨だろうがおしゃれでなろうが、この教材こそ最適だ。中宮様は、最初は驚かれるかもしれないが、きっと分かって下さる。私が中宮様の帝への気持ちに気づいたということも含めて、受け入れて下さるだろう。私はそう思っ、中宮様に「新樂府」を進講した。果たして中宮様は、その後何年も粘り強く勉強に励まれたのだ。

（山本淳子「紫式部ひとり語り」による）

〔注〕玄宗皇帝——唐の第六代の皇帝。晩年、楊貴妃を愛するに及び、

安祿山の乱が起こり、四川しせんの地に逃れた。

楊貴妃——玄宗皇帝の妃。安祿山の乱により四川に逃れる途中

で殺された。

藤原兼家——一条天皇の母方の祖父であり、摂政・太政大臣と

なった。

道長——兼家の息子で、道隆の弟。中宮彰子の父。

公卿——大臣や大納言、中納言などの高官。

父——紫式部の父である藤原為時。

中務宮具平親王

——中務省の長官である具平親王。天皇親政を行った村上天皇の第七皇子。諸芸に優れた博学多才な人物。

虞帝——中国古代の立派な君主である舜。

儒者——儒学を修めた人。

兼愛——自他の区別なく、平等に人を愛するという墨子の説。

本朝麗藻——一条天皇の時代の皇族・貴族の漢詩を集めたもの。

作者には一条天皇、具平親王、藤原道長、藤原為時らがいる。

下僕——めし使い。

〔問1〕最も世間一般に知れ渡った漢詩文集とあるが、『白氏文集』

が当時、人気を博していたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 幻想的な歴史悲劇を描いた「長恨歌」や善政によって民を救うために作られた『白氏文集』は、政治的ではあるが、文章が分かりやすく面白いため当時の日本の貴族に愛好されていたから。

イ 幻想的な歴史悲劇を描いた「長恨歌」や日常生活などを詠んだ詩、また様々な文章が収められている『白氏文集』は、当時の日本の貴族にも分かりやすく、好まれていたから。

ウ 玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」や日常生活を詠んだ詩や文章を収めた『白氏文集』は、白居易の死後に日本に伝わり、そのわかりやすさから当時の日本の貴族にもはやされていたから。

エ 玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」や善政によって民を救うために作られた『白氏文集』は、多少難解ではあったが、当時の日本の貴族に愛読されていたから。

〔問2〕そうした気概とあるが、帝が詠んだ詩の中でそれが最も強く表れているのはどこか。漢詩中の句である①～⑧のうちから最も適切なものを選び、ア～クの記号で答えよ。

- ア ①
イ ②
ウ ③
エ ④
オ ⑤
カ ⑥
キ ⑦
ク ⑧

〔問3〕 寒家⁽³⁾とあるが、ここでの「寒」と同じ意味の使い方として最も適切なものを次のうちから選べ。

- ア 寒花
- イ 寒心
- ウ 寒村
- エ 寒温

〔問4〕 真の漢学者の求めていたやりとりだ。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 君と臣と民とが心を一つにして社会を整えるという儒教の思想に基づき、善政を行えるようにと努めること。
- イ 臣下は帝の未熟なところをいさめ、帝は国家や人民のために善い政治を行うよう君臣がともに切磋琢磨^{せつさくたくま}すること。
- ウ 君臣が心を一つにし、法律によって社会を整えるという思想に基づいて善い政治を行うことをともに目指すこと。
- エ 摂政主導の政治をし、君と臣と民とが心を一つにして儒教に基づいた寛仁の政治を行うようにと努めること。

〔問5〕 波線部 中宮様のために私が選んだ教材とあるが、私はなぜ中宮様のために「新楽府」を選んだのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 『白氏文集』にある「新楽府」は民が天子に心を伝える詩であるため、中宮彰子にとって身近で理解しやすい内容であり、善政を行う意欲に満ちた帝の心に近づけると思ったから。
- イ 『白氏文集』にある「新楽府」を愛読し、天皇親政を目指している帝は絶対的な権力の座にあるため、帝の心をとらえることは中宮の地位の安定につながることを思ったから。
- ウ 『白氏文集』にある「新楽府」は政治向きで堅い内容ではあるが、漢詩文の心得のある中宮彰子が、善政を行う意欲に満ちた帝と心を通わせるためには絶好の教材だと考えたから。
- エ 『白氏文集』にある「新楽府」は善政により民を救うことが詠まれているので、中宮彰子がそれを学ぶことによって真摯に政治に向き合う帝の心に寄り添うことができると考えたから。

3
1
2

3

5
4